

ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の 発話 : 依頼と断りの発話行為より

著者名(日)	眞鍋 雅子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	19
ページ	77-100
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000985/

ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話 — 依頼と断りの発話行為より —

眞鍋 雅子

要旨

本稿では、日本語の習熟度が異なる学習者に「依頼」と「断り」の発話タスクを与え、異なるタイプの場面と習熟度が学習者の発話産出に影響があるかどうかを調査した。また、日本語学習者がこれらの発話タスクを産出する際に、どのような困難が生じたかをポライトネスの視点から事例ごとに質的に分析した。異なるタイプの場面とは、学習者がタスクを行う状況を3つの社会的変数（P=対話者との力関係・D=社会的距離・R=負荷の程度）(Brown and Levinson 1987)により調整したものであり、本研究では2つのタイプ（1つはP・D・Rの値が小さいPDR-Lタイプ、もう1つはP・D・Rの値が大きいPDR-Hタイプ）を設定した。その結果、学習者の発話産出データは、異なるタイプの場面と学習者の習熟度による影響があり、中級学習者にとっては直接的表現によりタスクを遂行できるPDR-Lタイプのタスクは容易だが、新しい言語形式や間接的表現を使いこなす必要があるPDR-Hタイプのタスクは難易度が高いこと、断りのPDR-Hタイプのタスクは敬語や語彙的な配慮表現を適切に組み合わせる運用しなければならず、上級学習者にとっても困難が生じることが分かった。

キーワード：ポライトネス 依頼と断りの発話タスク 場面 習熟度
事例研究

1. はじめに

依頼や断りといった発話行為は、相手への負担を考慮しながら発話の目的に応じて言語表現を選択する。しかし同時に、上下・親疎など発話の相手との関係によっても言語表現を選択しなければならないため、L2学習者にとっては容易ではない。誤った言語表現の選択は、違和感を与えるだけでなく、コミュ

コミュニケーション上の誤解や失敗を招く恐れがある。したがって、L2学習者が円滑なコミュニケーションを行うためには、目標言語において言語形式の知識が必要だけでなく、場面に応じた対人関係を考慮して言語表現を選択し使用する能力が必要であると考えられる。しかし、L2学習者がコミュニケーション上で、実際にどのような言語表現を選択・使用し、どのような困難が生じているかについてはまだ十分に明らかにされていない。そこで、本稿では習熟度の異なる日本語学習者に、異なるタイプの場面での依頼と断りの発話行為を行うタスクを与え、産出された発話データを分析し異なるタイプの場面と習熟度の影響を調べるとともに、日本語学習者が発話タスクの産出を行う際にどのような困難が生じているかをポライトネスの視点から考察した。

本稿では、まずポライトネス理論とポライトネス・ストラテジーについて概観したうえで、ポライトネス理論と日本語における言語表現について述べる。次に、本研究に関連する発話タスクを用いた先行研究について述べる。その後、本研究の結果について報告する。

2. 背景

2.1 ポライトネス理論とポライトネス・ストラテジー

ポライトネスとは、良好な人間関係や円滑なコミュニケーションを図るための社会的な言語行動（言語使用）を説明する概念であり、その理論的モデルとしてはポライトネス理論（Brown and Levinson 1987）が代表的である。Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論によると、人間にはフェイスがあり、多くのコミュニケーションの場で相手のフェイスを脅かすことがあるという。Brown and Levinson (1987) は、人間関係において相手のフェイスを脅かす可能性のあるこのような行為をフェイス侵害行為（FTA）と呼んだ。このFTAの度合いの強さは計算式で表され、計算式の変数は、P（相手の話者に対する相対的力）、D（話者と相手との社会的距離）、R（行為が相手にかける負荷）によって成り立つ。この計算式によると、自分と疎遠で社会的立場が上位の相手に対して言語行為を行う場合や、言語行為の内容が相手に負担をかける場合に、FTAの度合いは高まる。どの言語においてもFTAの度合いを軽減しようとするポライトネスは存在することから、ポライトネス理論は個別言語

を超えた普遍性を有する言語行動に関しての理論であると位置づけられている。

また、Brown and Levinson (1987) は、人がFTAの度合いに応じて選択する方略をポライトネス・ストラテジーとして提示した。ポライトネス・ストラテジーは5つに分類される。すなわち、①あからさまに言う(直言する)(bald on record)、②フェイス侵害の軽減を明示的に行う(positive politeness, 以下ポジティブ・ポライトネス¹と表記)、③フェイス侵害の軽減を非明示的に行う(negative politeness, 以下ネガティブ・ポライトネス²と表記)、④ほのめかす(off record)、⑤行為回避(don't do the FTA)の5つであり、①～⑤の順に数字が大きいくほど相手のフェイスを侵害するリスク(フェイス・リスク)が大きいくときに用いる。したがって、Brown and Levinson (1987) が提示したポライトネス・ストラテジーは、人がFTAを極力避けるための言語行動の選択のストラテジーを理論化したものといえる。

2.2 ポライトネス理論と日本語における言語表現

Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論によると、人は人間関係の維持を望む時、ポライトネスに基づき相手のフェイスを脅かさないように行動(言語使用)するわけだが、ポライトネスが「どのように言語使用に実現されるか」という点は、言語、文化によって異なる(生田1997、p.68)と考えられる。生田は、コミュニケーションの当事者が人間関係の維持を望む時、ポライトネスの観点からFTAを避けるように行動するが、何がFTAとなるかは言語、文化などによって異なるため、言語使用において「ポライトネスは相対的である」(生田1997、p.68)と述べている。山岡他(2010)は、生田(1997)の主張を受け、日本語には対人関係維持のための固有の表現が他言語に比べ豊かに存在すると指摘し、例として人の依頼を断る際に用いる「ちょっと今時間がなくて…」や、相手への非難を行う際の「君の説明、すこしわかりにくいかもしれない」のような発話に見られる副詞や文末表現などを挙げている。山岡他(2010)はポライトネス理論を理論的基盤としたうえで、コミュニケーションにおいて対人関係を良好に保つことに配慮して用いられる言語表現³を研究することの重要性を強調した。日本語には精密な敬語体系が存在するが、日本

語における発話をポライトネスの視点から捉えるには、敬語使用だけを対象とするのではなく、山岡他（2010）が指摘するように、対人関係を維持するためのさまざまな日本語の言語表現を観察し研究する必要があると考えられる。さらに、発話者が非母語話者である日本語学習者の場合、コミュニケーション上の不適切な言語使用が相手に誤解や不快感を与える可能性があるため、ポライトネスの視点から見て問題があると思われる、学習者の産出した言語現象を研究することは、日本語教育の観点からも重要である。そこで本研究では、中上級の日本語学習者に対人関係と負荷の度合いが異なる2種類のタイプの場面における発話タスクを与え、学習者がどのような言語表現を選択して発話産出しているかを観察し、その結果どのタイプの場面におけるタスクの発話産出に困難が生じているかをポライトネスの視点から明らかにすることを目指した。次の2.3では発話タスクを用いた先行研究について述べる。

2.3 本研究に関連する発話タスクを用いた先行研究

発話タスクを用い、さまざまなタスクの条件を変えてその効果を測定した先行研究には、大きく分けると心理言語学視点からタスクの難易度を操作してタスクの効果を調べた研究（Skehan 1996,1998; Robinson 2001など）と、語用論的視点からタスクの難易度を操作してタスクの効果を調べた研究（Fulcher & Marquez-Reiter 2003; Taguchi 2007など）がある。発話産出されたデータの言語的特徴を測定する分析基準として、前者は主に正確さ・流暢さ・複雑さといった基準を、後者は適切さ・流暢さ・計画時間といった基準を用いている。後者の例であるTaguchi（2007）は、「依頼」と「断り」の発話行為を行うタスクを英語学習者59名（L2習熟度上位群29名・下位群30名）と英語母語話者20名に実施している。タスクはBrown and Levinson（1987）のポライトネス理論に基づき、3つの社会的変数を調整した2種類のタイプの場面を設定し、発話データは適切さ・流暢さ・計画時間を基準として分析した。その結果、学習者は語用論的に難易度が低いタスクの発話を容易に素早く産出した。また、L2習熟度の上位群と下位群の間には、適切さ・流暢さに統計的な差がみられたが、タスクの計画時間については有意差がみられなかった。

本研究は、Taguchi（2007）の研究で使用された2種類の異なるタイプの場

面における「依頼」と「断り」の発話タスクを用いることで、日本語学習者の対人関係維持に関する発話の実態の一部が把握できるのではないかと考え、4名の日本語学習者を対象として実験を行った。本稿では、そこから得られた学習者の発話産出データを分析し、その結果を報告する。産出された発話データと学習者の習熟度、異なるタイプの場面との関係を多様な基準で把握するため、Taguchi (2007) の分析基準である流暢さ・適切さ・計画時間に複雑さ・正確さを分析基準として加え、5つの分析基準から発話データを測定し、計画時間を除く記述統計量を本稿では結果として示す⁴。また、学習者の発話産出データから、異なるタイプの場面における「依頼」と「断り」の発話行為に見られる直接的表現・間接的表現の種類と使用頻度を測定し、習熟度別・異なるタイプの場面別に比較する。さらに、ポライトネスの観点から見て問題があると思われる、学習者の発話データに着目して事例ごとに記述分析し、日本語学習者が「依頼」と「断り」の発話行為を行う時に産出において生じる困難点について考察する。

3. 課題

本研究の課題として、以下の3つの質問を設定した。

- 質問1：「依頼」と「断り」の発話タスクにおいて、異なるタイプの場面とL2習熟度が、L2日本語学習者の発話産出の正確さ・複雑さ・流暢さ・適切さに影響があるか。
- 質問2：「依頼」と「断り」の発話タスクにおいて、異なるタイプの場面とL2習熟度は、L2日本語学習者が使用する表現の種類と使用頻度に影響があるか。
- 質問3：「依頼」と「断り」の発話タスクにおいて、L2日本語学習者は発話産出にどのような困難を生じるか。

4. 調査

4.1 参加協力者

協力者は4名で、L2習熟度により二つのグループ（上位群・下位群）に分けた。L2習熟度は、テスト資格を有する調査者がACTFL-OPIを行い、レベ

ルを判定し上級を上位群、中級を下位群とした⁵。

上位群 (2) … A (女性) 台湾出身 大学院生 総滞在年数1年

B (女性) イタリア出身 大学院生 総滞在年数1年7か月

下位群 (2) … C (女性) アメリカ出身 英語講師 総滞在年数9か月

D (男性) アメリカ出身 英語講師 総滞在年数5年

4.2 材料

Taguchi (2007) で用いた4つの英語の発話タスクを参考に、調査者が日本語で4つのタスクを作成した⁶。4つのタスクはすべてロールプレイ⁷で、それぞれ「依頼」と「断り」の2つの発話行為を産出するように構成されている。また4つのタスクは2種類のタイプの場面があり、3つの社会的変数 (P=対話者との力関係・D=社会的距離・R=負荷の程度) (Brown and Levinson 1987) によって調整されている。すなわち、タスク1とタスク2は、参加者との力関係が等しく、社会的距離が小さい親しい友人 (タスク1) や姉 (タスク2) に対して、負荷が小さい発話行為を行うタイプの場面 (以下PDR-Lタイプ) であり、タスク3とタスク4は、参加者より大きい力を持ち、社会的に距離がある先生 (タスク3) や上司 (タスク4) に対して、負荷が大きい発話行為を行うタイプの場面 (以下PDR-Hタイプ) である。4つのタスクは、すべてクローズド・ロールプレイタスク⁸で、タスクカードの漢字にはすべてルビを振り、英語訳を付けた。4つのタスクの内容の詳細は表1に示す。

表1 発話産出タスクの詳細

タスク	タイプ	発話行為数	場面設定及び発話行為の種類
タスク1	PDR-L	2	親しい友人にペンを借りる (依頼) 親しい友人から映画に誘われる (断り)
タスク2	PDR-L	2	姉にテレビのリモコンを取ってもらう (依頼) 姉がコーヒーを入れることを申し出る (断り)
タスク3	PDR-H	2	先生に試験の日を変えてもらう (依頼) 先生から補講を受けるように言われる (断り)
タスク4	PDR-H	2	上司に休暇をもらう (依頼) 上司から仕事の変更を依頼される (断り)

4.3 手順

本研究は下記の (1) ~ (4) の手順で行った。

- (1) 調査者が日本語でタスクのやり方について個別に協力者に説明し、タスクにおけるロールプレイの場面状況を記載したタスクカードを与える。
- (2) 協力者はカードを受けとった後、タスクを行うための準備時間を与えられる。(時間は無制限)
- (3) 協力者は準備が出来たら「準備ができました」と言って、調査者にカードを返し、調査者を対話者としてロールプレイを開始する。
- (4) 1つ1つのタスク終了直後に、協力者に調査者がフォローアップ・インタビューを行い、計画時間に考えていたことについて尋ねる。

4.4 発話産出データの測定

2つのタイプの発話タスクにおいて、産出された発話データの正確さ・複雑さ・流暢さ・適切さを測定した。正確さ・複雑さ・流暢さ・適切さの測定基準の定義と分析項目は表2に示す。

表2 正確さ・複雑さ・流暢さ・適切さの定義と分析項目

基準	定義	分析項目
正確さ	文法的誤りが少ないこと	T-unit (文) の数に占める正しいT-unit (文) の数の割合 C-unit (節) の数に占める正しいC-unit (節) の数の割合
複雑さ	複雑な文構造の使用が多いこと	1文あたりに占める節の数の割合 (T-unit数に占めるC-unitの数の割合)
流暢さ	発話速度が速いこと	1分間の発話における異なり語数
適切さ	語用的な誤りが少ないこと	6段階 (0~5点) の印象評価 ⁹

適切さの評価点は1発話5点満点で、調査者と日本語教師1名がそれぞれで点数化し、一致しない場合は協議して決定した。なお、協力者のフォローアップ・インタビューと産出発話データはすべて録音し文字化した。

5. 結果と考察

5.1 正確さ・複雑さ・流暢さ・適切さ

正確さ・複雑さ・流暢さを分析基準として、L2習熟度（上位群・下位群）と依頼と断りの場面（PDR-Lタイプ・PDR-Hタイプ）別に発話産出を測定した記述的統計量を付表1～4に示し、結果について述べる。

正確さは、依頼と断りのすべてのタイプの場面におけるタスクについて、下位群が上位群より値が低かった。学習者の主な文法的誤用は、助詞の脱落、自他動詞の交替、授受動詞の使用の誤りであり、自他動詞の誤用は上位群にも見られた。

複雑さは、L2習熟度に関わらず、依頼と断りのいずれのタスクにおいてもPDR-HタイプのタスクがPDR-Lタイプのタスクより数値が大きかった。つまり、PDR-HタイプのタスクではPDR-Lタイプのタスクより複雑な文構造の発話が産出されていたと言える。これは、FTAの度合いが大きいPDR-Hタイプのタスクでは相手に対するフェイス侵害を避けるため、複雑な文を産出する必要があったためと考えられる。

流暢さは、L2習熟度下位群で、依頼と断りのPDR-LタイプのタスクがPDR-Hタイプのタスクより高かった。しかし、上位群にはこのような傾向は見られなかった。また、習熟度群別にみると、依頼と断りのすべてのタイプの場面において、習熟度上位群のほうが下位群より流暢さの値が高かった。特に、依頼と断りのPDR-Hタイプのタスクにおける上位群と下位群の流暢さの差は大きく、上位群は下位群の約2倍の流暢さの値を示した。したがって、本研究の参加者の流暢さに関しては、習熟度下位群ほど異なるタイプの場面の影響を受けたと言える。

適切さは、依頼と断りのPDR-Hタイプのタスクで、上位群のほうが下位群より高かった。場面のタイプ別にみると、上位群の断りのPDR-Lタイプのタスクと断りのPDR-Hタイプのタスクでは適切さに差がなかったが、それ以外は習熟度に関わらず、依頼と断りのPDR-LタイプのタスクがPDR-Hタイプのタスクより適切さが高かった。

したがって、本研究における依頼と断りの発話タスクにおいて、異なるタイプの場面はL2日本語学習者の発話産出の複雑さ、上位群の断りのタスクを除

く適切さ、習熟度下位群の流暢さに影響があり、L2習熟度は正確さ・流暢さ・依頼と断りのPDR-Hタイプのタスクにおける適切さに影響があった。

5.2 依頼と断りの言語表現

5.2.1 依頼

依頼のタスクの発話データは、Blum-Kulka et al. (1989) を参考に依頼の意味公式¹⁰に基づいて分析した。必要に応じて意味公式は追加し、それぞれの意味公式と例は本研究の発話データより抽出した。また、依頼の意味公式は、依頼表現の率直さのレベルにより、「～したい」「貸して」のように相手に要求する形で直接的に依頼を表す表現を直接的表現、依頼したいことを提案する（提案）、相手の許可を求める（許可）などの方法で間接的に依頼を表す表現を間接的表現として提示した。意味公式と発話例は付表5に、発話データより抽出された依頼の意味公式における直接的表現・間接的表現の使用頻度（回数）と割合（抽出された全ての依頼の意味公式の使用回数の合計を分母として%で算出）は付表6に示す。

分析の結果、習熟度上位群・下位群ともに、PDR-HタイプのタスクではPDR-Lタイプのタスクよりも多くの種類の意味公式を使用した。PDR-HタイプのタスクとPDR-Lタイプのタスクにおいて、間接的表現使用の割合は使用した依頼の意味公式数全体の79.2%を占めた。また、PDR-Hタイプのタスクでは、PDR-Lタイプのタスクでほとんど使用していない「予告」「条件」を表す間接的表現を依頼内容の発話に先立ってどの習熟度群でも使用している。このことは依頼をする相手のネガティブ・フェイスに配慮したためと考えられる。

5.2.2 断り

断りのタスクの発話データは、Beebe et al. (1990) を参考に断りの意味公式に基づいて分析した。必要に応じて意味公式は追加し、それぞれの意味公式と例は本研究の発話データより抽出した。また、断りの意味公式は断りの表現の率直さのレベルにより、「いいえ」「要らない」のように拒否や否定の形で直接的に断りを表す表現は直接的表現、相手に謝る（謝罪）、言い訳を言う（言い訳）などの方法で間接的に断りを表す表現を間接的表現として提示した。意

意味公式と発話例は付表7に、発話データより抽出された断りの意味公式における直接的表現・間接的表現の使用頻度と割合（抽出された全ての断りの意味公式の使用回数の合計を分母として%で算出）は付表8に示す。

分析の結果、「依頼」の発話行為と同様、参加者は習熟度に関わらずPDR-HタイプのタスクでPDR-Lタイプのタスクより多くの種類の断りの意味公式を使用した。また、PDR-HタイプのタスクとPDR-Lタイプのタスクにおいて直接的表現・間接的表現の割合を比較すると、直接的表現は意味公式数全体の8.3%だが間接的表現は91.7%と高かった。特に、間接的表現の中でも「言い訳」「聞き返し」の使用頻度が高かった（使用した断りの意味公式数全体に占める割合は「言い訳」24%、「聞き返し」19%）。これは、どのように相手のフェイスを保ちながら断りの発話行為を遂行すべきか、発話者が考えながら発話産出したためと考えられる。つまり、これらの間接的表現は断りの発話行為を和らげるために、一種のポライトネス・ストラテジーとして機能したのではないかと推測される。

「謝罪」の使用は習熟度に関わらずPDR-LタイプのタスクよりPDR-Hタイプのタスクで多かった。Taguchi (2007) は、母語話者（以下NSと略す）とL2学習者の断り表現の使用頻度を比較し、学習者はNSより「謝罪」を多用する傾向を指摘し、NSは断りの発話で「つなぎのことば」やあいまいな表現（probably, a kind of）を使用するが、これを知らないL2学習者は「謝罪を使用」したと述べている。本研究では学習者とNSの比較は行っていないが、断りのPDR-HタイプのタスクはPDR-Lタイプのタスクよりフェイス・リスクが高いため、PDR-Hタイプのタスクを遂行するための適切な言語表現を十分持っていない学習者は「謝罪」を多用したのではないかと推測される¹¹。

以上のことから、本研究では依頼と断りの発話タスクにおいて、習熟度に関わらず、異なるタイプの場面はL2日本語学習者が使用する表現の種類や意味公式の使用頻度に影響があることが分かった。なお、直接的表現・間接的表現の割合を比較すると、依頼と同様に、断りでも間接的表現が直接的表現より使用頻度が高いが、依頼より断りで間接的表現を使用した割合はより高かった。先行研究によると、断りの発話行為は依頼・招待・申し出・提案に対する「返答」として現れ（Beebe et al. 1990）、通常相手が期待する返答ではないため、

L2学習者に高度な語用論的能力を要求する発話行為 (Beebe et al. 1990) であり、他の発話行為より遂行が困難 (Gass & Houck 1999) である。したがって、本研究で依頼のタスクより断りのタスクで間接的表現の使用頻度が高いのは、断りの発話行為で依頼の発話行為よりFTAの度合いが強く、学習者にとって断りの発話行為がより難易度が高かったためと考えられる。

5.3 参加協力者の事例ごとの質的分析

5.3.1 参加協力者Aの事例

4つのタスクにおけるAの発話産出はすべて呼びかけから始まり、特にPDR-Hタイプのタスク4において、上司にどのような呼称で呼びかけるべきか苦慮していたことがAへのフォローアップ・インタビューから明らかになった。Aによると、呼称をつけずに会話を始めることは、「人間関係が上位の相手に対しては失礼」であるが、タスク4のロールカードには発話の相手が「上司」としか記載されておらず、どのように呼びかければいいのか「ずっと考えていた」とのことだった。水野 (1999) は「中国語では呼称の使用がコミュニケーション方略の重要な要素として存在し、回避行動はマイナス価値をもたら」し、「呼称の選択に支配的に働くのは主に年齢的上下関係」であることを指摘している (p.75)。また、周 (2007) は、断る場面における中国人学習者と母語話者の前置き表現を比較し、母語話者は呼称を使用していないが、学習者は呼称の使用率が高かったと述べた。これらのことから、中国語を母語とするAには、相手との上下関係に配慮しなければならないPDR-Hタイプのタスクを発話産出するにあたって、呼称の選択・決定が重要な要素であったと言える。

しかし、社会的な場面の発話タスクにおける呼称の重要性は、中国語話者だけに限るとも断言できない。滝浦 (2008) は日本語においても「敬語や呼称のような対人的距離の表現装置はそのままポライトネスの表現手段になる」 (p.76) と述べている。つまり、ポライトネスの観点から見ると、日本語の文脈において相手をどう呼ぶかが敬語と同様に相手との距離を適切に取るために重要な表現要素と考えられる。ただし本研究では中国語母語話者であるAの事例以外で、呼称について言及した発話データは得られなかった。

5.3.2 参加協力者 B の事例

次の (1) は PDR-H タイプのタスク 3 に見られた B の断りの発話である。

- (1) 「実はあの一、冬休みならもう実家に帰ることに決まっていますので、すみません、それはちょっと、それはお断りする、あの一しょうがないと思いますけど」
(タスク3-断りの発話)

(1) において B は、断りの発話行為における相手のフェイス侵害を緩和するため、副詞「ちょっと」を用いた。このように日本語の副詞には配慮の表現としての用法を持つものがあり、山岡他 (2010) は、これらの副詞が「本来持っている語彙的意味を対人コミュニケーション上の機能に特化させて生じた二次的用法」(p.192) であると説明した。したがって、程度副詞の「ちょっと」は相手の依頼を断る際に生じる FTA を緩和する役目を果たしており、フェイス侵害回避のためのネガティブ・ポライトネスの語彙的表現と捉えられる。さらに (1) において、B は断りの間接的表現である「言い訳」(「実家に帰る」) や「謝罪」(「すみません」) を使用し、フェイス侵害の回避を試みている。それにもかかわらず、(1) の発話は語用論的に不適切な発話である。その要因は 2 点考えられる。1 点目は「実家に帰る」という発話者の「言い訳」を「決まっています」「しょうがない」と話者にとって不可避である当然の出来事として表現した点である。つまり、これらの発話は実家に帰ることが変更不可能であると同時に、その決定は(自らが行ったにもかかわらず)自己の責任ではないという責任回避的な含みをもつ。これは相手のフェイスを侵害した FTA であると言える。2 点目は、「お断りする」という発話が、ポライトネス・ストラテジーとしては、最も相手のフェイス侵害が大きい「直言」(bald record) (Brown and Levinson 1987) に該当する点である。「直言」はフェイス侵害の軽減を明示的に行うストラテジーであり、D (距離)・P (力関係) が小さい相手 (すなわちフェイス侵害のリスクが小さい相手) に用いるストラテジーである。B は受容者尊敬の謙譲語である「お断りする」を用いるが、このような語彙的な配慮表現を用いても「直言」によるフェイス侵害は大きく、FTA であることを免れない。同様に、FTA と考えられる B の発話は、PDR-H タイプのタスク 4 に

おける断りの発話 (2) にもみられる。

(2) 「でも、えーと、ほんとに遅れてると思いましたら、とりあえず謝りたいと思いますけれども、あの一、実は変更する必要がないと思います」
(タスク4-断りの発話)

(2) においても、相手の「仕事のやり方を変更してほしい」という要求に対して、Bは「謝罪」しつつもフェイス侵害の大きな「直言」(「実は変更する必要がない」)を用いた発話を行い、相手のフェイスを侵害している。

(1) (2) において、Bは断りの間接的表現である「言い訳」「謝罪」をFTA回避のポライトネス・ストラテジーとして選択し、敬語や配慮の表現としての副詞を使用した。それらのことから、Bは(1) (2) の発話により相手のフェイス侵害を回避できると考えたのではないかと推測される。しかし、発話の適切性は、配慮に関する言語表現としてのローカルな語彙やストラテジーによって決まるのではなく、発話が行われる場面や発話の文脈によって判断される。発話の場面や文脈に応じてFTAの度合いを正しく把握し、的確な配慮の言語表現を組み合わせなければFTAとなる恐れがあるPDR-Hタイプのタスクは、Bにとって難易度が高かったと考えられる。

次にウチ・ソトの観点から、Bの発話データである(3)を考察する。

(3) 「来週の金曜日に、あの一、ふるさとからわざわざわたくしの両親はあの一、わたくしを訪ねにきますので、一日ぐらいをやすませていただけませんかでしょうか」
(タスク4-依頼の発話)

(3) はPDR-Hタイプのタスク4に見られたBの依頼の発話である。(3) の発話に見られる下線部の「わざわざ」は本来何かのついでではなく、特に目的となる事柄のためだけに行為を行う際に用いる。たとえば、会話において「わざわざお越しいただきありがとうございます」を用いる時、発話者は相手の行為を最大限に認め、感謝の意を強調することで聞き手のポジティブ・フェイスに配慮する。また、「わざわざいらしていただいたのに申し訳ありません」は

発話者が聞き手のフェイス侵害を軽減するため、聞き手が自分のためにかけた負担を認識していることを示す謝罪の配慮表現として機能する（山岡他2010）。しかし、(3)では、発話者Bが休みの必要な事情（両親が訪ねてくる）を説明するものの、発話の相手（上司）よりもウチ関係の人間（両親）に配慮した発話になっている。つまり、Bは「わざわざ」を配慮すべき相手に対して適切に使用していないため、聞き手のフェイス侵害をもたらす結果になっている。

滝浦（2005）はポライトネスの観点から敬語の問題を捉え、「敬語は距離化の表現であり、対象人物を“遠くに置くこと”によってその領域の侵犯を回避するネガティブ・ポライトネスの一形態」であり、「ウチ／ソトの区別が鍵」となるが、ウチ・ソトの境界は固定的ではなく「流動性が高く」、「話し手のとる<視点>とそこから表現される<距離>が語用論的“含み”を発生させる」と指摘した（pp.233-234）。さらに滝浦（2005）は、これらの<視点>と<距離>の敬語論を久野（1978）の「共感度」¹²を用いて説明している。滝浦（2005）を援用して（3）の発話を分析すると次のようになる。通常、話し手にとって「私の両親」に対するほうが、家族外の聞き手に対するより現実の共感度は大きい。Bの発話は共感度が聞き手より大きいはずの動作主（両親）が、Bのために「わざわざ」やって来ると述べ、ウチの関係の人間（両親）に対する共感度をソトの人間（発話相手＝上司）より遠くに置くという矛盾を引き起こす。そのため結果としてポライトネスに反する発話になったと分析できる。

このように、敬語使用のむずかしさは、敬語に関する言語要素のみが独立しているのではなく、敬語に関連する言語要素や他の配慮表現の要素も密接に関連する点にある。つまり、日本語のPDR-Hタイプの発話タスクでは、FTAの度合いを正しく把握したうえで、ウチ・ソトに考慮して文脈に応じたさまざまな語彙的な配慮の表現やストラテジーを適切に組み合わせて使用しなければ相手のフェイスを侵害する危険性を持つ。以上のBの事例から、日本語においてポライトネスの観点からPDR-Hタイプのタスクで円滑なコミュニケーションを行うことは、上級学習者であっても容易ではないと考えられる。

5.3.3 参加協力者Cの事例

次の(4)(5)は、PDR-Hタイプのタスク3、4に見られたCの断りの発話である。

(4)「あー、たぶん、ほかの予定、あー、ほかの、あのレッスンのスケジュール、…(略)…きめますか」 (タスク3-断りの発話)

(5)「また、また、予定についてはな、話しましょうか。」 (タスク4-断りの発話)

Cは、(4)(5)で相手の要求する日にちや予定の変更に対して、別の日や予定を設定する「代案」を提示し、間接的な断りの戦略として使用した。しかし、本研究で今回設定したPDR-Hタイプの場面では、予定や日にちの変更の決定権は話者よりP・Dが大きい相手側にあり、話者にはない。したがって、決定や話し合いを話者が促す(4)(5)はポライトネスの観点からは不適切である。これは、言語的能力に限界がある中級学習者の場合、「代案」提示の戦略を知っていても、相手のフェイス侵害を考慮してうまく発話に結び付けられなかったためと考えられる。同様に代案提示が聞き手のフェイス侵害を起こしている発話は協力者Dの発話データ(6)にもみられる。

(6)「あの、よければ、あの、毎日、あの、遅くまで、働ける。あの、あー、ちゃんと、レポートにします、けど、あの、スケジュールは、ま、ちょっと、たいへん。」 (タスク4-断りの発話)

(6)において、DはPDR-Hタイプの場面における上司からの依頼を断るため、毎日遅くまで働き(残業し)レポートを完成させるとの「代案」を提示し間接的な断りを試みるが、発話行為を完遂できていない。社会的上位者(上司)の提案に対する下位者からの代案提示は相手のフェイスを侵害する恐れがあり、本研究の中級話者には難易度が高いことがこれらの発話からわかる。

5.3.4 参加協力者Dの事例

(7)(8)は依頼のPDR-Hタイプのタスクに見られたDの発話である。

(7)「他の日、だ、大丈夫だったら、他の日、試験、うけてもいい、う、うれ、
うれても(うけても)いいですか」 (タスク3-依頼の発話)

(8)「来週の金曜日は、私の両親がきます。日本に来ます。あの、ひ、ひこき、
で、ああの、会いたいんですが、大丈夫ですか」 (タスク4-依頼の発話)

依頼の発話行為に関して、相手に配慮した日本語の言語表現は様々なレパートリーがあり、FTAの度合いに応じて発話者は言語表現を選択しなければならないが、Dの(7)(8)の依頼の発話は丁寧度が低く、配慮表現として適切ではない。その理由として、中級レベルの学習者は、知っている依頼表現のレパートリーが限られているため、(7)に見られる「～てもいいですか」や(8)に見られる「～んですが、大丈夫ですか」といった丁寧さの低い配慮表現を選択せざるを得なかったことが考えられる。Kasper & Rose (2000)は、依頼表現の習得のプロセスは4つの段階があることを提示している。4つの段階とは、①文脈に依存し、統語的知識が使用されない前基礎段階、②定型表現を使用する段階(かたまり表現・命令形を使用)、③分析表現段階(新しい言語形式・慣習的間接的表現を使用)、④語用論的拡張段階(語用論的言語領域の新しい形式、依頼の緩和、複雑な統語形式)である。依頼の直接的表現により発話行為を遂行できるPDR-Lタイプのタスクに比べ、より丁寧度の高い配慮表現が要求されるPDR-Hタイプのタスクは、発話者がおそらくKasper & Rose (2000)の習得プロセスにおける③以上の段階になれば適切に遂行できないと考えられるが、(7)(8)の発話データからはDが③以上の段階に至っていないことが予測される。但し、本研究におけるこれらのデータだけでDがKasper & Rose (2000)の習得プロセスにおけるどの段階かを明確に位置づけることはできず、これについてはさらなる調査が必要である。

次に、以下の(9)は断りのPDR-Hタイプのタスクに見られたDの発話である。

- (9) 「そうですね、うーん、私もそう思います。あ、あの、あ、ほんと、実はいいアイデアだと思いますけど、…」 (タスク3-断りの発話)

(9) の下線部は相手の発話(補講の要請)に好意的な反応を表明する断りの付随的表現(Beebe et al. 1990)と捉えられ、Dは相手の要請に同意を示すことでFTAを回避しようとしている。しかし(9)のPDR-Hタイプのタスク3では、社会的立場が上位者である相手(先生)の要求を発話者Dが評価する失礼な表現になり、ネガティブ・ポライトネスに違反する。

また、(9)においてDは文と文の接続詞として「ケド」を用いているが、すべてのDの発話データを観察すると、接続詞「ケド」の使用が多い点の特徴として挙げられる。藤森(1995)は母語話者と非母語話者の断りにおける「弁明」の意味公式の節末・文末の表示マーカ―を調査し、「ケド」を和らげの表現形式としての過剰般化であると指摘した。藤森(1995)によると、「ケド」は前置き部分に説明を付加する表現で使用される場合が多く、「ノデ」のように命題を間接的に伝達する語用論的力はないという。Bの発話には「ケド」以外の接続表現の種類が乏しく、そのため発話が単調に感じられる。もし藤森の指摘が正しければ、Dの産出発話における「ケド」も過剰般化である可能性がある。このように、PDR-Hタイプのタスクにおいては接続詞の選択・使用もポライトネスに関係してくるため、実際の会話における運用場面で学習者に対する指導が必要と考えられる。

6. まとめ

本研究では、4名の中上級日本語学習者の発話データを分析した結果、依頼と断りの発話タスクにおいて、異なるタイプの場面と日本語習熟度は学習者の発話産出に影響があることがわかった。また、言語表現の分析により、発話の相手に対するフェイス侵害の恐れが少ないPDR-Lタイプのタスクは直接的表現を用いて容易に発話産出できるが、フェイス侵害の度合いが高いPDR-Hタイプのタスクは間接的表現やポライトネス・ストラテジーの使用が必要であり、発話に困難が生じることが観察された。特に、依頼より断りのPDR-Hタイプのタスクにおいて発話産出の困難さは顕著に生じた。さらに事例ごとの言語的分析

により、ポライトネスの視点からこれらの結果を裏付けると考えられる以下の

①～④が観察された。

①PDR-Hタイプのタスクにおいて、呼称の選択は重要な意味を持つ可能性がある。

②断りのPDR-Hタイプのタスクは、語用論的に文脈に適した語彙の選択・運用やウチ・ソトの関係への配慮が必要であり、上級学習者であっても発話産出は容易ではない。

③中級学習者の場合、直接的表現により依頼の発話行為を産出できるPDR-Lタイプのタスクは容易だが、新しい言語形式や間接的表現を使いこなす習得段階に至っていない可能性があるため、PDR-Hタイプのタスクの難易度は高い。

④中級学習者は断りのPDR-Hタイプのタスクで、代案提示のストラテジーを不適切に使用したり、相手の提案を評価したりするといった誤ったストラテジーを使用する場合がある。

7. 日本語教育への示唆と本研究の課題

最後に、本研究の結果・考察に基づき、日本語教育に対する示唆を述べる。まず、習熟度の低い学習者にはポライトネス・ストラテジーを知識として指導するとともに、具体的にどの文脈でどのようなストラテジーが使えるのかを示したうえで、それらのストラテジーを使用するための言語運用力を育成することが必要である。また、断りの発話行為は習熟度の高い学習者にとってもフェイス侵害の可能性が高く難易度が高いため、学習者が発話の相手との上下・親疎関係を考慮したうえで、会話の文脈に応じたフェイス・リスクを正しく把握すること、学習過程で個々に習得してきた知識・ストラテジーを有効に統合することが、今後のコミュニケーション教育において重要である。具体例として、ポライトネスの視点からドラマ会話を分析して機能的解釈を行うこと(奥山1999)があげられる。奥山(1999)の研究は学習者による会話分析ではないが、日本語の上級学習者であればドラマにおける会話をポライトネスの視点から観察し、会話をメタ認知的に分析することができると考えられる。したがって、上級学習者にポライトネスの視点から会話分析を行わせるといった授業の導入も可能である。このような授業は、学習者自身の発話を相手がどう受け止

めるか内省させる効果もあり、コミュニケーション教育に有効であると考えられる。

本稿は協力者数が4名と少なく、質的に重点を置いた事例研究であるため、結果を一般化することはできない。また、習熟度上位群の協力者の母語が異なる点や上位群と下位群で同じ母語を持つ協力者がいない点など、参加協力者の選定にも問題が残る。今後の課題である。さらに協力者数を増やし、協力者の母語を考慮した上で、日本語母語話者との比較、異なる母語背景を持つ学習者間の比較を行うことが今後の研究において必要であると考えられる。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、ご指導、ご助言くださった堀場裕紀江先生、木川行央先生に心よりお礼申し上げます。西菜穂子さんはじめ、KUIS日本語教育研究会の皆様からも有益なご助言をいただきありがとうございました。また、調査に協力してくださった4名の日本語学習者の皆さんに心から感謝致します。

注

- 1 ポジティブ・ポライトネスは、相手に受け入れられたい・よく思われたいという欲求（ポジティブ・フェイス）を顧慮する方略であり、直接的表現などにより共感・共有など相手との連帯を表そうとする。
- 2 ネガティブ・ポライトネスは、他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくないという欲求（ネガティブ・フェイス）を顧慮した方略で、間接的表現で相手を遠ざける方略である。
- 3 山岡他（2010）では、これらの言語表現を「配慮表現」と呼んでおり、「配慮表現はポライトネス理論が示す言語行動以上に、日本語における言語表現に重きを置く捉え方である」と指摘している。
- 4 タスクが学習者の計画時間に与える影響についてはフォローアップ・インタビューの質的分析とともに拙稿（眞鍋2012）で述べた。
- 5 上位群の協力者A・Bが異なる母語背景を持ち、下位群の協力者2名（C・D）とも母語が異なる点は、本稿の結果に影響を与えた可能性を否定できない。協力者数の少なさとともに今後の課題である。A・Bは、実験時、再来日して滞日期間が4か月未満であ

- ったため、滞日年数の影響を避けることができるのではないかと考え、実験に参加してもらった。
- 6 Taguchi (2007) の附表に記載されたタスク例 (pp.132-133) と本文の表1「タスクのロールプレイ場面設定」(p.120) を参照し、できる限り変更を加えずに調査者が日本語に訳した。
 - 7 Taguchi (2007) では、調査対象となる発話行為から協力者の注意をそらすために、タスクに依頼と断りの2つの発話行為を組み込んでおり、本調査でも同様の形をとった。
 - 8 ロールプレイはインストラクションの程度を基準に、オープンロールプレイ (open role-play) とクローズド・ロールプレイ (closed role-play) に分けられ、後者は話者交替が行われず発話行為の産出の研究に使われることが多い (清水2009, p.37)
 - 9 「5 優れている—十分適切でほとんど語用的間違いがないかほとんどない」「4 よい—ほぼ適切で語用的間違いは少ない」「3 悪くない—いくらか適切で語用的間違いは目立つが適切さを妨げるほどではない」「2 よくない—語用的間違いが干渉して適切さを決定することが困難」「1 大変よくない—理解しがたいかほとんど理解できない。発話行為を遂行した証拠がない」「0 (発話行為を) 遂行していない」
 - 10 意味公式は「発話を社会の相互作用の中で見た場合の発話具現化のための最小機能単位」(藤森1995) と定義する。
 - 11 本研究では、断りのPDR-Hタイプのタスクにおける「謝罪」の使用が、習熟度下位群より上位群で多かった。本稿が主張するように「言語表現を十分持っていない学習者が『謝罪』を多用した」とするならば、「言語表現を豊かに持っているはずの上位群において下位群より『謝罪』の使用が多いのはなぜか」とのご指摘を査読者より頂いた。この点に関しては、今後協力者数を増やし検証していく必要がある。貴重なご指摘に感謝したい。
 - 12 久野は、話し手が出来事を描写するとき、どこに視点を置いてこの出来事を描写するかによって文が異なることから、視点の違いを表す手段として「共感 (Empathy) 度」(久野1978, p.134) という概念を導入している。

参考文献

- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』26巻6号: 66-71
- 奥山和子 (1999) 「ポライトネス視点による会話の機能的解釈」神戸大学留学生センター紀

- 要6 : 81-97 神戸大学留学生センター
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』
スリーエーネットワーク
- 周升干 (2007) 「断る場面における「前置き表現」について—中国の日本語学習者と日本語
母語話者の比較」『言語文化学研究 言語情報篇』 2 : 189-210 大阪府立大学
- 滝浦直人 (2005) 『日本語の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』 大修館書店
- 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用」『日本語教育』
87 : 79-90
- 眞鍋雅子 (2012) 「異なる社会的場面タスクが計画時間に与える影響—日本語学習者の「依
頼」と「断り」の発話行為から」 *Scientific Approaches to Language* 11 : 299-317 神田外
語大学言語科学研究センター
- 水野マリ子 (1999) 「談話における呼称の機能」『神戸大学留学生センター紀要』 6 : 65-80
神戸大学留学生センター
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』
明治書院
- Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusal. In
R.C. Scarcella, E. Andersen and S. Krashen (Eds.) *Developing communicative competence
in a second language* (pp.55-73). New York: Newbury House.
- Blum-kulka, S., House, J., and Kasper, G. (1989). *Cross-cultural Pragmatics: Requests and
apologies*. Norwood, N.J.: Ablex.
- Brown, P., and Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some univerasals in language usage*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- Fulcher, G. and Marquez-Reiter, R. (2003). Task difficulty in speaking tests. *Language Testing*
20: 321-44.
- Gass, S.M., and Houck, N. (1999). *Interlanguage refusals: A cross-cultural study of Japanese-
English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kasper, G. and Rose, K.R. (2002). *Pragmatic development in a second language, Language
Learning 52-Supplement 1* : Blackwell.
- Taguchi, N. (2007). Task difficulty in oral speech production. *Applied Linguistics* 28: 113-

135.

Skehan, P. (1996). A framework for the implementation of task-based instruction. *Applied Linguistics* 17: 38-62.

Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford University Press.

Robinson, P. (2001). Task complexity, task difficulty, and task production: Exploring interactions in a componential framework. *Applied Linguistics* 22: 27-57.

付表

1. 正確さについての分析結果

習熟度	依頼				断り			
	P D R L		P D R H		P D R L		P D R H	
	正 C / C	正 T / T	正 C / C	正 T / T	正 C / C	正 T / T	正 C / C	正 T / T
上位群	0.92	0.91	0.94	0.87	1.00	1.00	0.98	0.93
下位群	0.69	0.67	0.86	0.73	0.93	0.83	0.89	0.89

正 C / C : C-unit (節) の数に占める正しいC-unit (節) の数の割合
 正 T / T : T-unit (文) の数に占める正しいT-unit (文) の数の割合

2. 複雑さについての分析結果

習熟度	依頼		断り	
	P D R L	P D R H	P D R L	P D R H
上位群	1.09	2.27	2.17	3.27
下位群	1.08	1.91	1.17	1.84

3. 流暢さについての分析結果 (語/分)

L2習熟度	依頼		断り	
	P D R L	P D R H	P D R L	P D R H
上位群	106.1	114.8	113.6	104.5
下位群	79.9	57.2	92.4	56.1

4. 適切さについての分析結果 (点)

L2習熟度	依頼		断り	
	P D R L	P D R H	P D R L	P D R H
上位群	4.0	3.8	3.5	3.5
下位群	3.3	2.5	3.8	1.5

5. 依頼の意味公式

- ① 直接的表現 明示的要求 例：ペン貸してください。
 暗示的要求 例：テレビを見たいんだけど
- ② 間接的表現
 A) 慣習的表現
 提案 例：試験が受けられますか
 許可 例：試験を受けさせていただけませんか
 前置き—予告 例：ちょっと相談があるんですが
 前置き—条件 例：もしよかったら
 謝罪 例：申し訳ないんですが。すみません。
 感謝 例：ありがとうございました。助かります。
- B) 非慣習的表現 例：このペンはだめだな。

6. 抽出された依頼の意味公式の使用頻度（回）と割合（％）

依頼の意味公式		上位群		下位群	
		P D R L	P D R H	P D R L	P D R H
直接的表現	明示的	2 (3.8%)	0 (0.0%)	3 (5.7%)	0 (0.0%)
	暗示的	4 (7.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (3.8%)
	(小計)	6 (11.3%)	0 (0.0%)	3 (5.7%)	2 (3.8%)
間接的表現	提案	0 (0.0%)	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	許可	2 (3.8%)	3 (5.7%)	1 (1.9%)	4 (7.5%)
	予告	0 (0.0%)	4 (7.5%)	1 (1.9%)	5 (9.4%)
	条件	0 (0.0%)	2 (3.8%)	0 (0.0%)	2 (3.8%)
	謝罪	0 (0.0%)	2 (3.8%)	0 (0.0%)	2 (3.8%)
	感謝	2 (3.8%)	4 (7.5%)	2 (3.8%)	2 (3.8%)
	非慣習	2 (3.8%)	0 (0.0%)	1 (1.9%)	0 (0.0%)
	(小計)	6 (11.3%)	16 (30.2%)	5 (9.4%)	15 (28.3%)
合計	12 (22.6%)	16 (30.2%)	8 (15.1%)	17 (32.1%)	

7. 断りの意味公式

- ① 直接的表現 拒否 例：いえ。いいえ。
 否定 例：飲まないです。
- ② 間接的表現 謝罪 例：ごめんね。
 願望 例：補講はうけたいんですが。
 言い訳 例：帰国する予定があるんですが。
 代案 例：今度、一緒に行こう。
 約束 例：約束します、自分で勉強しておきますので。
 聞き返し（回避） 例：補講ですか。冬休みですか。
 濁し（回避） 例：あ、そうですか。ちょっと…。
 訴えかけ 例：このままで続けさせてください。

8. 抽出された意味公式（断り）の使用頻度（回）と割合（％）

断りの意味公式		上位群		下位群	
		P D R L	P D R H	P D R L	P D R H
直接的表現	拒否	1 (1.4%)	1 (1.4%)	2 (2.8%)	0
	否定	1 (1.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)
	(小計)	2 (2.8%)	1 (1.4%)	2 (2.8%)	1 (1.4%)
間接的表現	謝罪	0 (0.0%)	5 (6.9%)	1 (1.4%)	2 (2.8%)
	願望	1 (1.4%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)
	言い訳	4 (5.6%)	6 (8.3%)	3 (3.2%)	4 (5.6%)
	代案	3 (4.2%)	2 (2.8%)	1 (1.4%)	4 (5.6%)
	約束	1 (1.4%)	3 (4.2%)	1 (1.4%)	4 (5.6%)
	聞き返し	3 (4.2%)	7 (9.7%)	1 (1.4%)	3 (4.2%)
	濁し	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)	2 (2.8%)
	訴えかけ	0 (0.0%)	2 (2.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	(小計)	12 (16.7%)	26 (36.1%)	8 (11.1%)	20 (27.8%)
	合計	14 (19.4%)	27 (37.5%)	10 (13.9%)	21 (29.2%)